書道アートをめぐって（その５）

横山　豊蘭　*Houran Yokoyama*
（美術学部）

名古屋芸術大学主催の現代アート展「ボーダーレス展」は、２０１７年１０月７日（土）ー１０月２９日（日）まで、名古屋市中区丸の内にあるアートラボあいち大津橋会場で開催された。今回、私は作家としてではなく、プランニング、ディレクターを務めさせて頂いた。同時に１０月１３日（金）ー１８日（水）まで、大学内 A&D センターギャラリー BE とギャラリー be で「書道アート展４」を開催、キュレーションをおこなった。また現在、２０１８年に岐阜美術館で開催される清流の国ぎふ芸術祭「ぎふ美術展」の企画運営委員を務めさせて頂いている。２０１７年度、毎日新聞社主催「富士山学生書写書道展」では、名古屋芸術大学書道アートとして最優秀団体賞を受賞。個人賞として、姫野綾花（人間発達学部、４年）が最高賞である毎日新聞社賞を受賞、池上夢与（洋画４年）が県教育会会長賞、海野悠子（洋画３年）が大学書道学会会長賞を受賞。１１月２６日（日）、静岡市民文化会館で表彰式が開催された。

「ボーダーレス展」

2017 年 4 月、名古屋芸術大学は、音楽・美術・デザイン領域が「BORDERLESS」に統合し、芸術学部芸術学科として生まれ変わった。今回の「ボーダーレス展」は特に、３つの領域を超えた共同企画展として、音楽・美術・デザイン領域の卒業生から、田中副学長、津田副学長、大崎教授によって、それぞれの領域から２名程度、計７名の作家が選出された。テーマは、領域を超えたボーダーレスなコラボレーションである。

現代は「ボーダーレス」な時代、すでに名古屋芸術大学の卒業生の中には社会でボーダーレスに活動する作家達が多くいる。私は本来、書道家、アーチストとして活動しているが、今回の様にディレクターとして、「点」で活動する作家達を「線」で繋げ、年代を超えた「出会い」の状況を作るという役割は、私の活動の中心的な要素でもある。まさに「書道アート」は、東洋のハードコアである「書」と、西洋のハードコアである「アート」（ART）を融合させ、日本における「書道」と「アート」の境界線を曖昧（ボーダーレス）にする。それは決して心地よいだけではない。強烈な矛盾と向き合うことでもある。しかし、それは現代社会を見つめ、また現代に生きる為のアートとしては必須の事柄だ。私自身、名古屋芸大を卒業後、東京で領域を超えた交流をし、名古屋芸大の友人との仕事も数多くおこなってきた。今回のボーダーレス展フライヤーでも題字を書かせて頂いたが、これまで私は、書道家･アーチストとして、ギャラリーや美術館、そしてそれ以外のパブリックな空間での作品展示、書を使用したデザインや広告、書道パフォーマンスイベントなどの出演、音楽、照明、演出や、ラジオやテレビへの出演など様々な表現活動をおこなってきた。ライフワークとして行って

いる幼稚園児から９０歳以上のすべての年齢層の方々への書の指導。海を越えて、海外での「書画会」などの活動。私の著書「書道の教科書」は、2018年、中国語版が発売される事になっている。書はアートとして、年代も領域も、国境も越えている。

名古屋芸大を卒業後の私の活動にとって、社会の中でのボーダーレスな交流は当然の事だった。友人との出会い、仲間との仕事、それによって様々な活動をさせて頂いてきた。それは学生時代、キャンパス内での領域を超えた友人との交流、あるいはサークル活動などの「遊び」の中での「学び」がベースとなっている。現在取り組んでいる書道アート部の積極的な活動も、そういった理由からである。テキストを書いている現在、名古屋芸術大学「ボーダーレス展」は開催中である。今回、大変有意義な経験の機会を頂き感謝している。

Intellectual・Art・Occupation「知的・アート・職業」

学生や保護者にとって、芸術によって「生活できるのかどうか」という漠然とした問題、同時に切実な問題が、今後の大学選びの重要な選択肢になっている。アーティストであっても「生活」がある。もし「ビジネス」「就職」という言葉が芸術的でないとするならば、日本語で近いのは「生業」あるいは「業」という事になるだろうか。

書という感性と、書道という文化（様々な領域を研究、理解し、繋げる感性）

書道という文化は、日本人の文化的気質に密接に関係しているからこそ愛好家が多く、公募展でも多くの出品者がある。そこには様々な書道団体による組織、書の周辺には「表装業」「筆」「墨」などの製造業、様々な業者、業界による「職業」「生業」があり、書の周辺の人々の生活という基盤がある。しかし、以前話題となった日展問題の様に、公募展制度の問題と批判あった事は周知の事だ。近代化以降、戦後日本におけるジャンルの形成を担保してきた公募展が、小説家の高橋源一郎氏の言うように「戦後７０年の日本の民主主義と共に制度疲労を起こしている」。ある意味ではそれも、現在の芸術におけるボーダーレスな状況を引き起こしている理由の一つであるだろう。

書道は本来「文字」を書くという認識が一般的だろうと思う。文字を書く事は、領域を分ける事そのものだ。文字は概念を形成し、様々な事物に命名し、分断する。現代書によって、書家が「文字を書かない」事も実践されてきた。しかし、「線」を引く事は、領域を分ける事である事に変わりはない。その証拠に、前衛書という「ジャンル」が形成され、形骸化していった。現代書も、現代美術と同様に「古い言葉」となっている。領域は常に混沌から形成され、その時代に一定の秩序と平成を与えると共に領域間のぶつかり合いを生む。そうやって歴史は作られて来ただろう。書は常に物事を分断し、同時に繋げる。書を書く事は矛盾そのものと向き合う力でもある。

そういった書の本来性は、現在の書教育で正しく理解され伝わっているとは言い難い。また、書家によって価値観は様々であるし、書の教育現場において、また寺子屋的な書道教室などにおける教育的クオリティーも様々だ。高校、大学の学校教育も含

め、もともと「書道芸術」の世界は「混沌」としている。また、日本の書道文化にまつわる様々な慣習に問題もあった事も事実だ。しかし、だからといって「書」そのものの価値が下がるという事ではない。日本には、書道文化という日本独自の、表現にまつわる文化的基盤がある。周辺にある様々な日本独特の文化や勧業が、戦後の書道業界を後押しし、ある意味ではこれは大きなエネルギーの宝庫だった。

現在、時代と若者の価値観は変わりつつあり、今のままでは、書は日本のアートとは言えない。もうひとつ上の目線を設定する必要がある。例えば、書という東洋的ドゥローイングによって、知性と感性によるバランス感覚、芸術と社会、自身と社会を繋げる感性を磨くこと。日本の書の本来性は「消息」（手紙）と和歌にあり、本来、自身と他者を繋げる為に日本の書は存在する。これまでの海外での活動から、西洋文化のコアを知るにARTを学ぶ必要があるのと同様に、東洋のコアを感じてもらう為に、西洋人に書を伝えるのは有効だと私は考えている。東洋の「書」（東洋的ドゥローイング）を通じてしか会得できない感性がある。また、日本美術や東洋芸術の感性が、ヨーロッパにおいて特異だったのは、書文化があったからであり、フランス、パリでの藤田嗣治の成功も、その一例と言えるだろう。筆記用具がペンやワープロになる以前は、筆が筆記用具であり、書はすべての日本人の必須教養だったのだ。洋画家、日本画家を問わず、全ての人々にとって、毛筆と墨が身体の一部であった。筆と墨で「何か」を書くという意味では「誰もが書家」だったと言えるのだ。そういった基本的感性、素養を、当時の人々は知らず知らずのうちに、書を通じて身につけていたのではないかと私は考えている。書という高度で東洋的なバランス感覚を身につける事によって、アートと社会、アートとデザイン、ビジネス、広告、マスコミ、テクノロジー、日本文化、食文化など、様々な異分野を繋げる感性を持ち、芸術的感性をもって実社会で活躍できる人材を育成したい。また、学生にとって「就職活動」における知識や教養とは別の、実社会に対応する「作法」を身につける事も必要だろう。書を学ぶ事は、同時に東洋や日本古来の思想を学ぶ事でもある。「茶の本」や「武士道」などが、欧米において、現在も「ビジネス書」としてベストセラーであり続けている事も、見逃す事はできない。

近年、アートの世界では「日本アート」という言葉も広がってきている。現在の日本にフィットする、日本人の感性、日本文化を基盤にした新たなアート、書のアートによる芸術教育の可能性を私は今も信じている。

「書道アート」「洋画２コース実技」非常勤講師　横山豊蘭

●タイトル　『ボーダーレス』展

テーマ　ボーダーレス・コラボレーション

会期　２017年１０月７日（土）～１０月２９日（日）

開館時間　１１:００～１９:００　・開館日（金曜ー日曜・祝日）、休館日（月曜ー木曜）

オープニングレセプション　１０月７日（土）１８：００～２０：００

アーティストトーク　１０月１３日（金）１７：００～１８：００

出品作家　佐藤美代、田中翔貴、鳥巣貴美子、中田ナオト、原田裕貴、細井博之、
松田るみ

会場　アートラボあいち大津橋会場３F　愛知県名古屋市中区丸の内三丁目４-１３
愛知県庁大津橋分室３階

主催　名古屋芸術大学

企画　音楽領域／美術領域／デザイン領域 共同企画

総合プロデュース　田中範康／津田佳紀／大崎正裕

プランニング・ディレクション　横山豊蘭

フライヤーデザイン　渡辺浩之

協力スタッフ　山口諒（洋画２コース助手）／池上夢与／竹内創也／藤原 葵／
伊藤 真／海野悠子／佐藤元紀

●タイトル『書道アート展４』

会期　２017年１０月１３日（金）～１０月１８日（水）

開館時間　１２：１５～１８：００　休館日１０月１４日、日曜。

クロージングレセプション　１０月１８日（水）１４：００～１６：００

アーティストトーク　１０月１８日（水）１６：３０～１７：３０

出品作家　海野悠子、小浦知也、伊藤真、池上夢与、藤原葵、竹内創哉、杉山美紀、
本間恵里加、横山豊蘭

会場　名古屋芸術大学 A&D センター ギャラリー BE、ギャラリー be

主催　名古屋芸術大学 書道アート

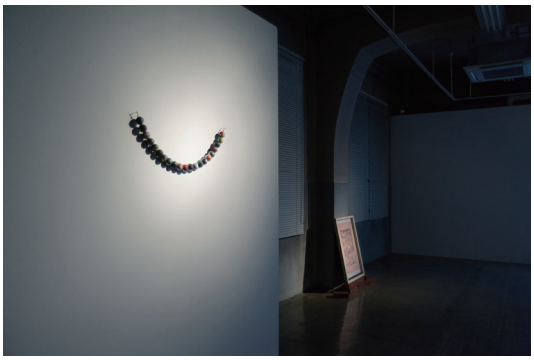
企画　キュレーション／フライヤーデザイン　横山豊蘭

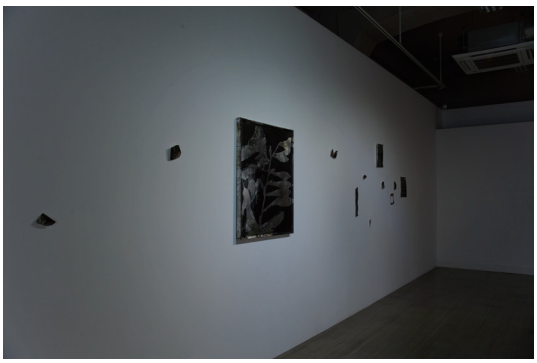
協力　大崎正裕

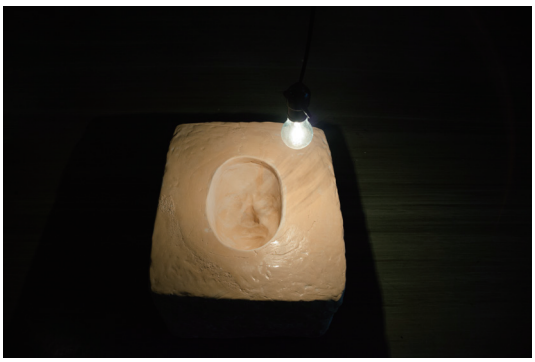
『ボーダーレス』展　２０１７年１０月７日（土）～１０月２９日（日）アートラボあいち大津橋

オープニングレセプション　竹本学長あいさつ

会場展示風景

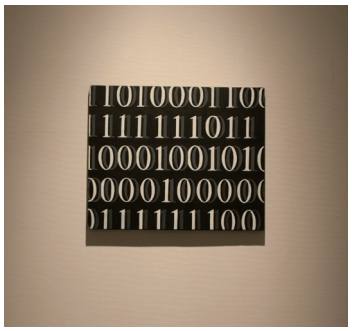






『書道アート展４』　２０１７年１０月１３日（金)ー１０月１８日（水）A&D センター ギャラリー BE、ギャラリー be

会場展示風景



・池上夢与氏によるパフォーマンス

・トークイベント　アーティストトーク 10月18日